

[8] フィリピの信徒への手紙 1 章 19 節-24 節

「生と死」

《1》

パウロが切に願い、希望しているのは、キリストがあがめられることです。あがめるとは、大きくする、ということ。もともと大きな御方である主イエス・キリストを、そのとおりに大きくする。これが、あがめるです。

それも公然とあがめられるように。つまり、力強く、生き生きと主イエス・キリストの恵みと力が誉め称えられ、讃美されるように。

今までもそうであったように今も、そしてこれからも永遠に、キリストがあがめられるように。

そして、そのようにキリストがあがめられることが、私の身において起こるように、というのでした。

パウロの身において起こる。それは、パウロが語ること、行うことのすべてを含めて、パウロという一人の信仰者の全存在において起こる、ということです。そのようにして、キリストがあがめられるように。

さらに、その私が、「生きるにも死ぬにも」、とあります。主イエス・キリストが私の身においてあがめられることは、それが私が生きてしても、死んでいても、変わることなく同じようにあがめられるように、というのでした。——ここまでが 20 節で言われており、前回見たことです。

そして、この「生きるにも死ぬにも」とあるのですが、このことが、さらに今朝の 21 節以下で展開されています。

21 節の御言葉「私にとって生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」。これはよく知られている御言葉ではないでしょうか。

このまま受け入れることができると思いますが、しかしまた、このことでいろいろと思いを巡らせていると、少しわからなくなってくるような、そのような御言葉かもしれませぬ。しかし、大切な御言葉です。

生きるとはキリストである。これと同じようなことが述べられている、やはり有名な御言葉があります。ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のために身をささげられた神の子に対する信仰によるものです」。

どちらにおいても、自分自身は後ろに引きさがっている感じですね。主イエス・キリストが前のほうに出て来られているようです。

ガラテヤのほうでは特に、信仰者と主イエス・キリストとの結びつき、それもしばしば神秘的結合とも呼ばれる堅い結びつきが、語られています。主と私たちとは、もはや切り離すことができないまでに堅く結びついている。

ですから、それはもはや生きているのは私ではなく、主イエス・キリストである、という思いにもなりますし、端的に、私が生きること、それはキリストである、とい

うことにもなります。

ただし、言うまでもないでしょうが、自分が全く無くなってしまい、自分の考えとか意志、感情といったものもすっかり無くなってしまっていて、まるで自分がロボットのようになってしまった、ということではありません。

ですから、「生きるとはキリストである」とは、一言で、主イエス・キリストと常に共にあることですね。堅く結ばれていて、互いを分けることはできない。キリストにあって私があり、私のうちにキリストがおられる。

それは私が地が、御言葉に熱心に聞き続け、愛と祈りをもって主との交わりに生き、喜んで主に従いゆき、絶えず主に希望を置いて歩み続けることです。

自分の生活のどんな時、どんな場所においても、主イエス・キリストの恵みと力がわたしを生かしてくださっている。このことを確信し、実際そのように励まされて生きる、その生き方です。

またここで、生きるとはキリストである、と並んで、「死ぬことは利益なのです」ともあります。

聖書を離れて考えたら、普通、死ぬことが利益だなどとは、考えられないことでしょう。命あつての物种、と世の常識は言ったりもします。死んで花実が咲くものか。死んだら、すべて終わりだと言います。

もっとも、生きていても辛いことばかりで、何の喜びもない。死んだほうが、この苦しみから逃れることができる。悲しいことに、そのような思いに捕らわれてしまう人もいます。

そのような人にとっては、その人の心のうちにおける限りでのことですが、死ぬことは利益だと言えるのかもしれませんが。

では、パウロもそのような思いから、死ぬことも利益だということでしょうか。牢獄に捕らわれており、この先どうなるかわからない。こんなことなら、いっそ早くこの苦しみから解放されたほうがましだ…。

もちろん、まったく違います。彼が死ぬことも利益だというのは、それが霊的な利益をもたらすからです。つまり、救いが完成され、完全に清くされて、いつまでも主イエス・キリストと共にいることができるようになるからです。

こうして、「生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」となります。

なお、この 21 節の訳文ですが、いろいろな外国語の訳を見ても概ね、このような訳になっています。ただし、カルヴァンは少し違った訳し方をしたようです。

こうです。「私にとって、生きることも死ぬことも、キリストが利益である」。

生と死との二つを対照的に並べるではありません。この生と死の両者に対して、主イエス・キリストがどのような意味をもっているか、ということに関心を向けた訳になっています。

つまり、生きるにも死ぬにもキリストこそが私の利益となっている、ということですね。

恐らく文法的な理由によるようですが、カルヴァンのこのような訳文はあまりほか

では採用されていません。しかし、ここに生と死を考える上での、とても大切なことが簡潔に述べられている、と思います。

つまり、キリスト無しでは、生きることも死ぬことも、どちらも結局は何の利益もないのだ、ということです。

キリストがおられるからこそ、それで、生きることも死ぬことも、私たちにとって限りない利益となる。主イエス・キリストを信じて、主イエス・キリストと共に生きるなら、今も、そしていつまでも、私たちは真実に生きる者となる。

「生きることはキリスト、死ぬことは利益」。それはまた、「生きるも死ぬも、キリストだけが私たちの利益である」ということです。

《2》

こうして、生きることと死ぬこと、この二つの間で板挟みの状態になっている、とパウロは語ります。

生きていれば当然、その働きを通して、フィリピの人たちをはじめ、多くの人たちに霊的な利益を与えることができるでしょう。しかし、死ぬことも自分の霊的な利益を考えれば、それが救いの完成ということで、最善のこととなります。

だから、どちらを選ぶべきか、わからない。

23節「一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい」。

深いところでパウロの本当の思いは、この世を去ることです。それによって、一層確かに主と共にあることができる、ということですね。

同じようなことが告げられている御言葉として、コリントの信徒への手紙二 5章8節があります。「私たちは心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます」。

主イエス・キリストと共に住むこと、これが何よりの私の望みであるというのです。そこにはもちろん、いわば単純に、主イエス・キリストと共にありたい。そのことを喜ぶ、ということがあられるでしょう。

少し別の方面から、話をしますと、私たちの恋愛感情ですね。誰かが誰かを好きである、とします。

なぜ、好きなのですかと、相手や第三者から聞かれたときに、何と答えるでしょうか。例えば、きれいだから、やさしいとか、頭がよいとか、性質がよいとか、いろいろ理由を挙げるかもしれません。

しかし、それは決して根本的な理由ではないことを、恐らく本人自身がよく知っているでしょう。なぜなら、もし、理由として挙げたことが、変わってしまったら、どうなるのでしょうか。

例えば頭がよいというのが理由であれば、加齢とか病気とか、何らかの理由であまりぱっとしなくなったときには、もう好きではなくなるということでしょうか。仮に、もしそうなら、それは打算的な考え方をしていた、ということになってしまうでしょう。

しかし恐らく、そのようなことはないと思います。もし、本当に好きならば、そのようなことはないでしょう。

つまり、人を好きになる、ということは、いわばその人がその人であるままに、好きになるということで、そこには何ら条件も付かないはずです。

なぜ好きか、と問われれば、好きだから好きだ、と答えざるを得ないところがあります。しかし、それではあまりに愛想のない答えになるかもしれませんので、いろいろ理由を考えて、これこれだからだと、もっともらしく言う、ということでしょう。

パウロがキリストと共にいたいと熱望している、その理由には、これと同じようなことがあるでしょう。とにかく、キリストと共にいたいのです。

もちろん、主イエス・キリストは私たちの罪を身代わりに御自身で引き受けてくださって、十字架の上で私たちのために死んでくださり、私たちに罪の赦しを与えてくださった、というまことに大きな愛と恵みを私たちに与えてくださる御方です。

主に抛り頼む全ての人に、平和と慰めを与え、希望に生かしてくださいませ。主にあって喜びはいつまでも続きます。

主の恵みは数え挙げればきりがありませんが、そして、その一つ一つに感謝し、そして喜ぶのですが、煎じ詰めれば、主と共にあることを願うということ、——それは、主と共にいたいからである、ということですね。

さらに、この世を去って主イエス・キリストと共にあることこそが、信仰と救いの完成として、ぜひとも進むべき道であると、パウロは確信しています。

このことが、先ほどのコリントの信徒への手紙二 5 章 8 節の前後で述べられています。

さきほど、5 章の 8 節だけを読みましたが、ここは大きなまとまりとしては、4 章 16 節から 5 章 10 節までを、一つのまとまりとして読むべき個所ようです。

全体を読むことはできませんが、5 章 6 節と 7 節を読みましょう。「それで私たちはいつも心強いのですが、体を住みかとしてしている限り、主から離れていることも知っています。目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです」。

体を住みかとして生きるというのは、地上の歩みです。そして、それが「主から離れている」とあります。

ここだけ取ると、首をかしげてしまうかもしれません。主イエス・キリストは、この地上の歩みにおいても、常に私たちと共にいてくださるのではないのか。

もちろん、そのとおりです。厳密に言えば、主は天上にあって父なる神さまの右におられ、主イエス・キリストの聖霊が、今、私たちと実際的に共にいてくださるということになるでしょう。

しかし、御霊はあくまで、主イエス・キリストの御霊ですから、主イエス・キリストが私たちと共にいてくださると言って、何の誤りもありません。そのとおりです。

では、改めて、なぜ、第 2 コリント 5 章 6 節で、私たちの地上の歩みが「主から離れている」と言われているのか、ということになります。

——それは、この世を去って、キリストと共にあるならば、それが意味することは、

私たちが直接、主に相まみえることになるからです。その絶大な素晴らしさがあります。コリント書では、パウロはそのあまりの素晴らしさに、すっかり心を奪われてしまっている、と言ってもよいでしょう。

地上にあって、信仰に生きるとは、目に見えるものによらずに、しかし主とその恵みを確信し、主に抛り頼み、恵みに感謝して生きることです。物理的な意味と言ってよいでしょうか、そのような意味で、直接主にお会いすることはできない。

しかし、世を去るならば、直接主にお会いすることができる。その素晴らしさと較べるなら、この地上に生きているというのは、それは「主から離れた」生き方だと言わざるを得ないものがある、というのです。

いかに彼が、世を去ることを熱望しているかがわかります。

ただし、第2コリント5章の続きの9節では、次のように語って、それを一つのまとめとしています。

「だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい」。

決して、この世にあって、体を住みかとして生きることが、あまり意味や価値のないこと、少ないことなのだ、というのではない。それどころか、その時も、体を離れたときと同じように、主に喜ばれる者として生きる。これが大切だ、と言います。

ただし、主と共にあることの素晴らしさのゆえに、地上の歩みの素晴らしさが、どうしても少し陰ってしまう。それがパウロの、正直な思いでしょう。

では、そのように自分が欲する生き方を徹底的に追求するのか。

そうではありません。それが24節です。「だが他方では、肉にとどまるほうが、あなたがたのためにもっと必要です」。

肉にとどまることが必要である。その理由は、生きていれば実り多い働きをすることができるからです。フィリピの教会の人たちはもちろん、もっと多くの人たちに励ましと慰めと力という、霊的な利益を与えることができるでしょう。

つまりここで、自分の願いということではなく、人々にとっての必要性、ということに思いを向けています。

これによって、自分がどうするべきであるか。これが決まってくる。これが次の25節で語られることになります。

《3》

今日はここまでです。

私たちは生きるにせよ、死ぬにせよ、キリストと共にあることこそが、私たちの霊的な利益となります。

そして主と共にあることは、生きていても、死んだとしても、それぞれの仕方、それぞれのところで、私たちは堅く、主と共にあることができます。

パウロの切なる願いは、主イエス・キリストがあがめられることでした。

主と堅く結ばれて、絶えず主と共にある信仰者パウロです。彼の歩みそのものを通

して、主イエス・キリストはいよいよあがめられました。

主があがめられること。それはまた、私たち信仰者一人一人に向けて、そのように生きるようにと、呼びかけられていることにほかなりません。

2021年10月10日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、御名を崇めます。

生きるとはキリストであり、死ぬことは利益です。そのように、生きるにせよ、死ぬにせよ、主イエス・キリストと堅く結ばれ、つながっているならば、それこそが揺るぎなく確かな利益となり、私を真実に生かしてください。

この確信と感謝をもって、主イエス・キリストと直接相まみえることを熱望しつつ、パウロはこの地上の歩みを、力を尽くして走り行きました。

生きること、死ぬことが第一の問題なのではなく、主イエス・キリストがあがめられることこそが、心からの願いでした。

許されて、今地上の歩みを続ける私たちです。どうか、パウロと同じように、この身において主があがめられるように。そのことを願いつつ、これからも主と共に歩む者とさせてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司